

# 神の偉大なみ業に感謝して

院長 松 澤 員 子

今年創立一三〇周年という記念すべき年を迎えています。今、改めて先達たちがそれぞれの記念の年に纏めてくださった『神戸女学院史』を読み解いてゆく時、歴史的事実を越えた真実に出会うことができそうです。

創立者であるタルカット女史とダッドレー女史がそれぞれ日本でのキリスト教伝道のための宣教師としての働きを決意され、太平洋を渡られたとき、学校創立など予想もされなかつたと思います。お二人が未知の港、神戸に到着されたのは一八七四年(明治七年)。そこには神の創造のみ業に参与する出会いが備えられていました。先ず、神戸の街角を往く少女たちです。当時、まだ封建制のもとで男尊女卑の慣習に縛られていた少女たちにキリストの福音を伝えたい、そんな思いが募っていったのでしょう。次に、すでに神戸で宣教活動を開始されていたアメリカからの宣教師、特にグリーン宣教師との出会いがあり、彼らの支援と協力がありました。そして、キリスト教に改宗改心した日本人、とりわけ三田藩主九鬼隆義氏の援助でした。神がタルカット女史とダッドレー女史の献身を祝福され、助け人を備えられて、一八七五年(明治八年)神戸の地に「女学校」として本学院が誕生し、その後、女子高等教育機関として大きな発展を遂げてきました。しかし、一三〇年の歩みには幾多の大きな試練の時がありました。特に、キリスト教への

弾圧の強かった太平洋戦争の時代に聖書を講壇から降ろすことなく建学の精神を堅持する指導者が与えられたことは神の恵みでありました。

今、少子化、国立大学の法人化、グローバル化による国際競争の激化など、とりわけ大学を取り巻く環境は非常に厳しく、また大きな変革の波が押し寄せています。こうした状況の下、ともすれば学校存続の危機感ばかりが先行し、数字合わせの改革策が論議されかねません。私たち人間は目前のことにあくせくし、思い悩む弱い存在だからです。その弱さは時には傲慢な思いとなつて対立を引き起こしてしまします。そのような私たちであっても、神は受け入れ、神の創造のみ業に参与することを許し、用いてくださっていることを感謝する心を日々の祈りの中で新たにすることが求められているのではないでしょうか。本学院で働く教職員がこの祈りを共有することこそが神戸女学院の教育の原点であり、そこから建学の精神を現代社会の中でいかに具現化し、特色ある教育を展開してゆけるのか、また惰性に陥ってはいないか点検し、将来計画を立案し、実行してゆくことが求められています。

創立一三〇周年。今、改めて本学院の歴史を通して働き、導いてくださった神の偉大な創造の業を感謝し、どんなに厳しい時代にも神は必ず導いてくださることを信じて、仕えてゆく者でありたいと私は願っています。

「ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。だが、神の定めを究めつくし、神の道を理解し尽くせよう。」

(ローマの信徒への手紙第一章三三節)